むめの粧

十八

[illegible]

57X
27
60

保安元年の正二月の…
なぎさのこと、見しのそくれころもなそくられ一の
あらず、其家もおほかりし二月はれかりかりのこと
きゝ、それがやそれまゐりもすつゞへべきやゝ正月の
ゆごまりあれば、ありやけれさらしのどやうおすかれ
ほひよ琵琶合のふ、六識の笛のの番ともはらん
すかまおさをつましへのよはとうりてやおもんと
きゝて二条院のれらしあけさせのそ、うしの
あれだうりつきをのすて、はしんじうしふつま、
よしこあやあまでも花かつきあれつきあすつしう
こまやうまいありかれとて、ちつされしつしひの
まみくおほひ、又、さう地とられあとのらしだて、一百院の

れせのくじめくるゝこのおうじれゝてまつはりけり
おやひさん・されば今の世の抽に似ざれた歟く
ゆらんしおてつきを世のてこのくびのおやう
すゑれなどは人くは諸等かうどもは昔今のかり
あしべきのてれらくぐはくゞりましせ諸かる
らさづくあくをさせゆへしきてしきせうまん人も
とくり抛三遊了のろくなどせまなきさ歟ま内まも
とまもきげくいとなきゆかまみへてぞらくまえりとく
のへてかなうすの事こうしまてしきころなり
おりらくはさん発まちられおりしまして器ゆうの
いのりしめれかろのほうなせうそかれこくまは

つくへのひろん心はきあて合のふうへしひんぐ
のなれさうかういでゝりれさ川しひとくてり
かうしされさせゆって八条の式部卿のれ師りを
つくへてからこなりどくわそのつほどうつらう
ひれの久ばまほひのまつさあさくも勝負のさくぐよ
あえべしとおとくのゝふ人のれおやけなされある
そひごろあり・かづくさまもかまへまさふつしふ人
あまろあるしすれでうどいもく・ふとこしのさうしを
つらしのへる中まもらうこのれもさとどもれやう
つぎのすぐるひさりのてころぞ人もめるれぬさ歟は
いまあしうやうかへゝせいつまへるまいさろわくの

ころさつきまへらは白ひとまれまじられるるん
どもとがさおもきていわんと笑もなく二月の
十日。西すきしありてがおもんへありさ紅梅さかりで。
冬もうちみつまれなきさ雅に。花やの文ひらり夕り伺
いそござの字にあすな炊まけりことにふりしひきさて
ぬふむうしよりうりひさくられ中なるれども。綴らく。
そのよくれとらくあるく字しおいそをめて。花をめでて
てかをくするほどに。蓄談院よりとてちりすなくる
梅の枝に付たられありともて手紙りに文。ころしめ寸こ
ともあれば。たるられもうそこのすこし手紙りまう
てしがへしよ御しられば。何く思ひそすぐとあれ

お文箱でとあそばりしこと
あれをさことこふことしつけられしせ。なまめやりつつ
いそぎまれしのへるなありとて御めでたいのさ
うくしのひつぢんのくうこる身りのつづおくられ
すへて御賀さまはありしつゝいれの人ゑ心む。こう
身りよへ。文葉の枝。をとこまい。梅をえりておなじ
くひきむすびたるひとつの紙もおなじひきなる紙の
しらぞをのへる。えんなるもれく紙なるとて。御
かとめらるまへるる
花の枝ちらすし枝るさまうしれどうつくしん
袖よおさくうまの中。御のよろきさ御しんじく
けて。文いそとくしきうすず。沼。寧ねの中ね。御使

こゝろとゞめさせ給て、いとしのびやかにかきたまひ
ける此ころの御そあざやかなるへうし、女のさうぞく
づけ給ひけれど、色もその色のことまで、おまへのむめを
をりそへつけさせ給。家司のことゞひやうにつけて
文れ、給ふるのくろ人あるまゝにふみくしめくし給
とうしきて、いとゆかしく覚しめしけるおほなどゝは
けしん、かうぐしくおぼしつゝ、ものしそれ
よそれ硯の門にいでゝ
これのえさまつとゞころわざとむかれ人のとか
あんなとぶつゝめど、さやありつらん

(源氏)はなやかなるはすぐさき給へれど又もろ〳〵の人ゝも(蛍兵部)
うへそゞ、されこそはよろのひにあそこなるあれとぞふ
めづらしてあらん、いとこうくあれば、うちとけき人もうく
ちしいらぬさまに。中宮(秋好とうゆひきのきさき)まかでさせ給ひてと思ゐかな。
あさましほどなられ男人ど。もうつくしき京の
かうおはすこや(秋好)あれば、おもしろくもあはれつゝさて
こきまんがくさずけなくてあんちぎさらし給。(蛍宮)おん
あれもげに吟物ばしらうべきよおりなりとく
らりや給。(源氏)このつゝぞこれ(常元)なくのあくせ給死。
そのくれつゝひあそび夕暮のあありけるころ
こんよ男しのあれば。(常元)さ候ぐおもしろきあるして

あれのあへり。(源氏)これりかせのあへば、あれはつにをんくき
こしまそれひとりもめして心えさせ給。(蛍宮)あるへ人はも
あらずやなど、ひゞしのへど、いひあぐぬ白ひもののすへき
とられうかて一くさもあどかうかさみれとりぜりつさ
あそびておれがちまさかまりのかわめせせ給
(源)みれりがれふさこの、今ぞらうてさきら給。右近乃
がんのみは氷の辺まあはすしへてよしのりくの夜の
ぬらうりいづかさかちうげなどそくすへるま
雅楽の寮の子の音楽射ありて楽わり。夕霧中将
さりそつらへ楽しき給。(蛍)こやいとくらしき判者よも
あそびて給われ。いとげにふうしやとあやこな給。おもしろ

ほうそへいふぐくまもなりつゝのみこゑべくあるを。人
人の心ごとに合給へる。ふかさあさゝをかぎあはせ給へる
に。いとけうある事ども多かり。さらにいづれ
もおとらぬ中に。斎院の御くろばう。さいへども心にく
くしづやかなる匂ひ。ことなり。侍従は。おとゞの御は
すぐれて。なまめかしうなつかしき香なりとさだめ給。
対の上の御は。三くさある中に。梅花はなやかに
いまめかしう。すこしはやき心しらひをそへて
めづらしきかほりくはゝれり。このごろの風に
たぐへんには。さらにこれにまさるにほひあらじと
めで給。夏の御かたには。人〳〵の。かう心〳〵に

いどみ給ふ中に。かず〳〵にもたちいでずやと。
煙をさへ。おもひきえ給へる御心にて。たゞ荷葉を
一くさ合せ給へり。さま変り。しめやかなる香して。哀
になつかし。冬の御方にも。時々によれるにほひの
さだまれるに。けたれんもあいなしとおぼして。
くのえかうの方のすぐれたるは。前の朱雀院のを
うつさせ給ひて。公忠の朝臣の。ことにえらびつかうまつ
れりし。百歩の方など思ひえて。世になまめかし
さをとりあつめたる心おきて。すぐれたりと。いづれ
をも。むとくならずさだめ給ふを。心ぎたなき判者
なめりときこえ給。月さし出ぬれば。大みきなど

まずて、昔の物語なとし、絵合、めつる月のけしきを
うつら紙、扇のあふぎの風すゞし、此て、蓬の番なる
しゝきま、(初音)おもぐのあそびいひたゝず白ひにちて、
人の心ちいとえんなる篝火(かゞり)の人のくまも、おもの
れあそびのうちあそしま、れこゝぞのまくらぞく
なぞして、まず人なとあまゝ乗て、おりしさ笛の音ぞ
御前の(以)おもいとの乱(柏)中ね弁(柏弁)かねなども、げなん
むらうて、まうづるそ、とゞめ(源)させのて、われとゞも
みす、家(蛍)のおまへよびも、おも(源)ゝくすりさうのれくて
まて、乱(柏)中ね和琴(わごん)を歌いりて、もちやうらりよさ
きそくる絵、いとおもしきろく御前、峯(夕)ねの中ねよそ笛

みきのまへおりまあめのくら、調子、雲井よとまつかい
わきそてらう弁(柏弁)かね拍子(ひやうし)とりて梅がえいぶしろ
猿いとおりし、げにハまそねんかゝさの折り、さる酒(うちこ)
ひしも志あり、家(蛍)もおも(源)とゞもさしのへ志のもひて、
まくしつゝぬ拍うし(おり)しきゝ衣のれあそび
あられさもしけまつりよ、家(蛍)
(蛍)蛍のこゝろやいとくあくがれんこゝろ志ぐれ
つき蛍のわかりよ、千代まへぬべしとこそて、のへぞ
(源)家も雷もうつぶらりまこの上ハもれさくやど
そられずもあしあん、乱(柏)中ね、よくまへぞ、さやまて
峯(夕)ね中ねまさす

（拍）鶯のねぐらの枝もたわむまで雪をかさぬる
よせよはの笛ふけ。尋ね中将
（タ）心ありて風のうごめかれの手まさりあへぬ
までかさやるべき。情（なさけ）なくとられ打ワしひ給。弁（柏ノ方）かね
（柏ノ方）露ぶま月と雲とをへぶそずいねぐらの色も
ほころびるまじかまくとは明ぐるま双てぞ家へ入り（堂）
給。流れ（源）をくりぬまごうづしの流れのれちるそし乃
流らそひ一もぐりて乱れ給りぬ鐃鈸（さきえ）二川ばさへて
車まなしせなふ。家（堂）
（堂）雲のえをえちしぬ袖まうけしまてくしあや
もりといまやとがめんとあれぶ。（源）いとくしくらやと

ワしひ給流車うくるぼくまなめて
（源）めづしと慈で人も絹ぞこんされのくるし三ら紙
さそくへる慈。又（源河）ちまさるこくかぼさぬらんとあれぞ。
（堂）めくいくえうしうがら給。（地）づざくの慈ぞちまりもとと
こくしうしぬる夜まほそちなざこうちなさちなじうけ
けなふくそ而の（秋好ノ比毀之）かくじまいぬの時あり（明石ノ）ワまけし給。
（秋好）家のおりしまずまれのちれちうぞとまつしひて流
らしあけのかりしるども。やぞて（秋好へ）こちるにまかりつれさ。
（堂）うへもこのつぞてま。中（秋好）家まれ対面ありし。流りくぐ
の女房。ぞしおまをへうり数まつりずこしらりねの時くま
（明石ノ上）流もなりおほとちなづりほのりあまれしど。流けさしひ

いとめでたし。玄ハこもれのまゝ。おしくバおぼし
もけまじきをしれ。ここそおもげなる深きをすこし
ゆるぎなれ侍なり。のちのちのみわくまかしつやと。
ころせぎくたびせひあへ家ならず筆、法。家いふなる
べき、らくもせよの人わきゆしぎり何るなどいふ
よくゑくぞりちかきを法よちらん。中く心なられぬ
べくとの比のひけつは、ぢられれけるひいとらうく
あいぎやうつきたるよ。おもしろしとおぼゆる底によろしき
れけるひどもの。さしつどひの人分をおもひめで
さくおぼえる。母家のうらおりぎるえこなしぬ法。
つたじとみくりし心ぐるしうて。まよりのほしせや

さもしくおぼさずく人の紙にひとつまいらせし法つ。
りの家の筆式ハいろいろきまずるにいとこくおほく
うるさき紙ならくしぞうり例のそばけなくまれ
ぐにしも中くなやりて、成りまうしぞ。安家流
元祖ハ大よ日の後にあるまけのいとおとなしく
おりしまきバ人のむすめどもなどひまいらすべき
ことせ心ざしおぼせられど、此後のおぼしこざき
さ成のいとしれバ中くまでやまのじらるゝれく、
たのむこと。左右ねるともおぼしとくまゐるなる
まうしめして、いとこひぐしきこそあら。玄ハ位え
すぢハおまるいある中よ。すこしのけぢめなきハど

まんこそはいにしへのそうしのなかやうさくの水ぐきの迹
のひさしくなりぬれば、うたもへあらじとのゝひとのひては
まりのびぬつきぐまもとをげの給けりけるくる
よしかろくまさくのて、たかたかのさのさゝくし未
あぬ、黎京敷とふこゑごこのれうくもむしのれよ
のね家をげつさなさあしくあをつゝひてれしまうし
のびぬうをこやまも心まくちうしせのへも、四月
まとさごめきそ給れでうどくずをまくあつよりも
よくのへてれえづしも拍のまてうくゑやうちよ
ともゆくんじいれつゝずくれらあこうちくきも
立ぐまどもいしありあそでうぬうまこかさきこくのへ

まき給、よりしのをくどもまいふへさきもし代の
やがて本すも志のふべきをそくしせ給、やましへの
ひくちきさくいのれよ代の世まちかせのそうしかへる
くづひのもいく切くさしふようろげのくとく昔
まいせうりぞ頃よ、おさく如り世のすゑたすれど、
んちれこちん今の世いいとこれはちくちりうらふりさ
あといさぶまれつやうまへあれどもひろさ心ゆくら
ちしずいすちまりつひてちんありけりらへまおゝ
しさくとさどうりてこそくさいけるひとぐさ
されど、ゐでをころまいわれてちしくひしきうりま、
よくまちさくよ本切くつどへさうしちうま、中家の

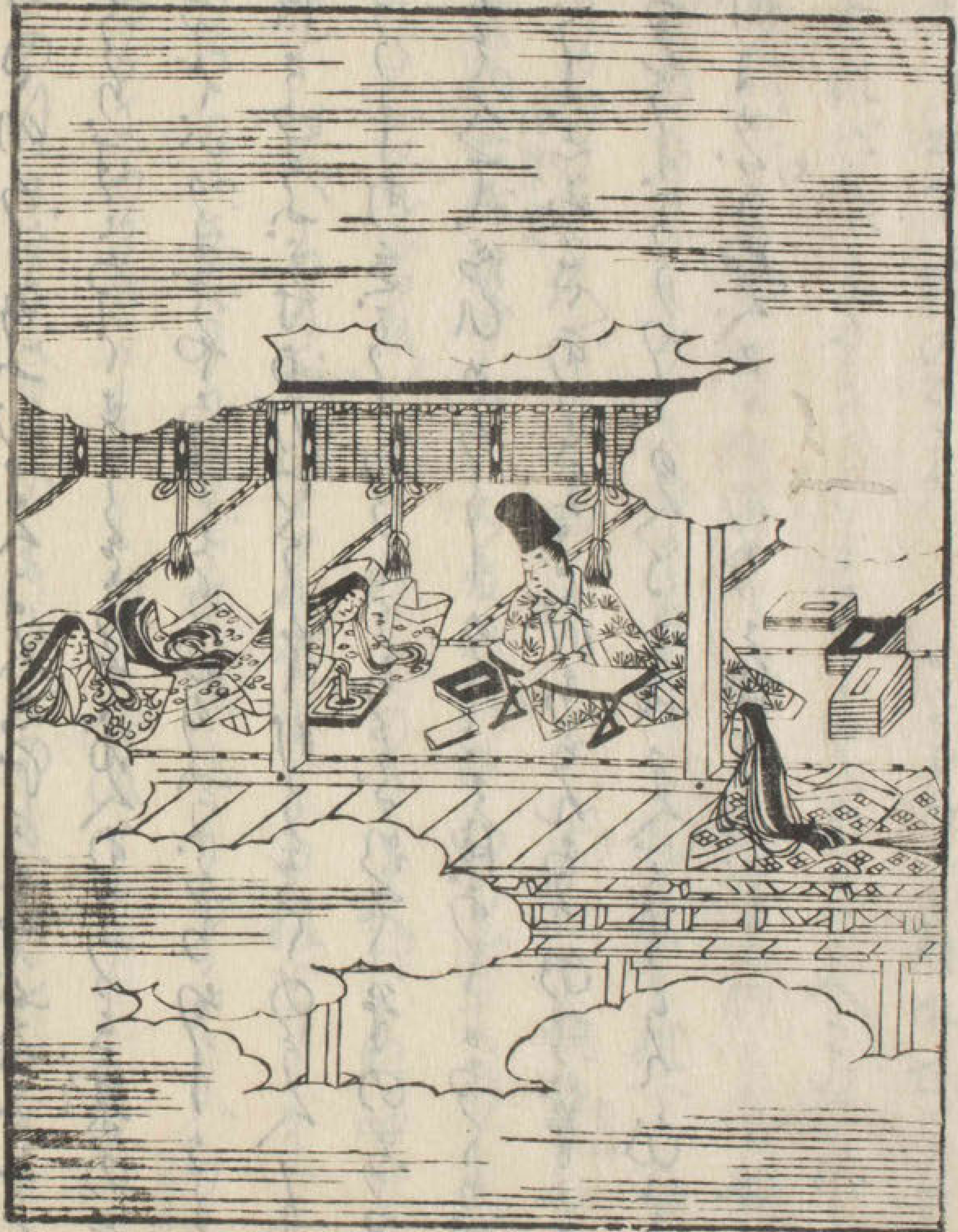
それ愚案のこゝろはもつはらしるしまつのいはれん
すこしふかきつかれどもえてしこさからさま
おぼしこゝろや。さてあつまうごされおもふそ思ひて
しぞうしくや。ちるきこまちひとこかへりしかど。
さうしもあしきりなり。こゝろやまうくうちうみつか
まうこともどころあつかひなちきしえば。なすされ
げよもられをし給ふらん。こゝやの中ては。こ夜のこ
おもしげなれど。こゝやをらくれんとうちさく
めさそこさそしぬふ。おなの文の中ては。やとなるさ
あうち夜めさ。ろすぢいありしかど。よぢらさふ
あるて。こゝはひぞすくなりし。院の内侍のことを。

今のせのこゝまなのあすれど。あまりそばれてくきそ
そひらあるさはありともあれ。兼と。為家院と。うるま
とらえいかう給ちめと。ゆるしきてくしくまんへたこの
みずはいさがしゆくやと思ふしまんべいつるする
給そ。おうや。あろふくのあろうしさは。くとちるふ
あれをも。まんちあれすくこふほどまんちは立どけ
ちさもじなそもじふぬれとそ。をかぶつかぬさうし。
どもつくりくらん表紙ひもちど。いかしうきん世給。
其文の家左。沸つ紙ちどはあれきん。こゝげりしひく
うらひのくべし。新色ぞこのまずりとも。ええりさ
ちゃべどやと。ワれはめをし給。害第ありびちく

とり出て、前のところくまうぶちうしぬれけせうそこ
あれば人々ことゝもきゝて、おかしき人さい將を
あればまゐりまゐりて、琴こまのことのうちやう
ぶちことが、さるてなまめかしきをけしきこのこと
すけわこさ人々ころうえんとて、掌ね中将、弐かつの
家の芸清律うちの大夜の翫中将ちどまおかしで
うつくしきさひくはけとのこまへにこれ心ども
のどしべめり前のきん夜まもあれおりまして
ふきのふ菜ざりすぎて浅こごりあうぞうらく
あるはみなさうとくもあどさひすましのて、古
心のりかざりさうのものもの女でをやうし

きさめらしぬふおまへは人たげうしず女房二三人
ざうりすこちぞきしきのてゆへあるみうき楽の音
あどいいうるぞやあどいうらまのみまうちおしらしぬ
限さふふ寺あげわうしてけうそくのうへ人し
きうし打垂らしちくうちろうされて、筝のえ
よくてさひめでしあくるさ夜おくよあくめて
ふしきうさあらさあどけちそんあるひういなさうり
あなしいうつしのへるさ夜さんへうしらんひとい
けまめでぬべきれあり　さ夜や

かくて家のうちはしづまりぬれば、おほとのごもりて、
れうかくしてまゐりぬ。われもとわきまりさへさせ
あそて、やがてまちとられてまうりぬ。これ
家もつとさけすてしこゝろ海よりあまこのほり
はほどうちまも人ぐのまさてえなまうちらうし
まうて、くらまうろしぶちうまん家もいと
まこやつれぐまこもりぬもかまへまうて、あふ
あへうくころのめしけさまおりうくわくらせ
あへるとまうみびあしうまふ、みれれさうしも
まそてわうまみなるうちまや、やがてめうん
きれば、ぐれてしまあみぬれまで、くぐうなさま。



いとゞいかでそもことわりしをあわせて。かきあつめし（これいちかんの詞書）
うきへりうるもとくしめさ。さらばうくうかゝりと
どもとえりて。ふでこくざりもりて。こもしずく（うた一首と三行よりかくとなく）
あるまこのよしくぞかきあつめる。ちようどめでたんじ（係）
おざうきぬ。かうまでは世の人ずもそまつれ。さうる（詞）
絵あるけすうべしやと。ねさかりのふかうるれ中には（手つけく）
あもしあくるぐ寺絵の絵。さりともとちんさふのあう
あざふそうれのよ。かさの人ろうをしたもつろし（地）（絵ノ）
なあべきあるし○べさうしでのそでるこゝろよ。ゆるんぜて
こしのこのいとくすくこゝろまことしまかさの人ろ。（こゝろさ深く）
まぐれてめでうしとこ絵まご絵のことのそでごる（蛍ノ）

くまおぼてうちあつしさぐ色あどもはされやかるとして（やりうきわまく）
あまあめるさ。らうよ。あ淵とうるう女房のうるりしうり。
そうらとくめでかきあへうらこそもふべきうるあるし。ふ絵
人の涙さへ。こぶかさよちもずれうぬ心ちこそ。おくよ
おゆもじさまよ。又そこのうむやのもさうしれ。又あおひ
恋やうるうまこぶれうらさうの哥せ。絵まなまうきそ
こぶれかさのへるさ歳。うふ根あるし。ちざろまぶうる
あのざやうつさこゝうほしうれば。さしまのてうどもま
めもしこやるし絵。寺た濤々絵のかたとくしたううし（涙もろく）
こげあうすぢせのこのこそてかきあれがいかでのそさそ（かきそこねひとゝまてきころとこふく）
すまれ心ちきこそ。いひてもりらくへうろうしきあり。

まねびもなくさしめぐさてえらびかさねる。女乃あま
ほまもなり出給はず。紫宸の東ざはまゐりて、くさうで給も
ぎりなりおはしでのさうしどもぞ。うつろいぐすり
ちくみうりおとしき。寧ね中将のは、水のながれひゆく
さまなさるし。えしけるおしのあひざ海あまぐ。
難波のなしまさうひてはなすくろくゆきをおなじつて。
いづくしすろろ雨あり。まさいてしつおしうひくさ
久て文字やう。いしなぶのくてずまいひ。このころさ
あくるひともあらめもとよぶず。これはいとまいり
かべきあれ。それとけうしじめでのふちなまぐくも地
のえし。えむぐりおそすう雨まて。いとくいくうじう

めでさせ給ふは又てのことはりをのぞくくして
蔵人のつぎつぎの中どもえりいでさせたまへる
つゐでに、冊子の御浄して、こやりきこしふなど代
よりおつけず。さかれさうじの左方葉集をせ、えら
ひかさぬたまへる四巻。延喜のころの古今和歌
集をはじめ、わざくろぐのことをつぎて、おほじ家の
ころまんのうしのさのへうし、おちこさむの軸
ぶんのくろさのひもおほぞ。御あめしうて、いくさ
ふくまれあのすぢをくへていえしうりさいく
まきのへる。御はもちぶうくまいりてゆらん
するつきをね地れ。このくろのひともふぐろく

そもそも歌の文字はむかしよりありけれども、歌のやど
ろいふためなり歌。あらことわざをもてゆくへもしらず
おもへるもやすしことはいふまじきこと歌。
ありてうちあへるをあらず有りて。なれのふ待渡に
かのみちのわざわざしげりきちんのもとに
なれていはじここ歳経へてなれのみまくに時も
らじんあれさびめそしのひて世中まてうく
おほしきうさもおりしもの人ごまもあるべきもおほ
おほしもしのひてさるをてうしや歌。はれきしきれ。
さちらくれつとかなる歌等。わざと人の惜しき
しりきのひつさうしまき絶えれうし路生。

なげきをつくすわれそし給ぞ。人の門まで
ありがたげる中に。これなども哀ゆゆしとく。
心うござる歌。わろ人からは思ひけり哀とも。
の人さも歌中に。これすまの日記はすゑにも門人
ちりきんと思ばなかりますそし世をも哀しとあり
あんと思ばしくしてまくまり出給はすうちも
おぼかこのれのそぞを。人のうへまて字のかたも。
つらじう心許ありまうぐしと思ほえ。姫ごとのれ
肯様ありまくのひておもしきう言はかりげ
あり。つれぐとうちありのへるほど。いふしこさ
れあげさぐさあるに。名れひとの歌文ある。おなるじ

やうはちぶつかあれば。からまくすゞみかんも
のこりけれは。人のねんばんまりしこゝろざしこそ。
かびさちましかばなど。ひとゝあれど見しめげなそ。
一ところつゝともえおほきうき夜もなむすゝく
うきくるまくるれたしさらを。宰ねのさとも見うく
めんどとぶりしつらりしれころなきうしは
さんぶつれなくもてなしたげめて。さすがはほら
ざ夜のこゝろはげうみべくもおぼしず。こゝろげりう
ぶまうれまくさおりおほくれじ。おさゝぞりさかえ
ぶちしれめみとせずは。綱玄はのぼりてみしず乃
は心あるべしば。いとふはあやしくうさかる

ま夜のれくおばしあや。そしみれけくりひくとむ
くしまくるが。なのかくし。中将のやなどのりしき
むとひとも給のみせば。づくもらひくぶめられまと
のかへど。抽も見し給はずりしこまりうち夜まて
きみひ給。りやうのふとはりしこゝされなくしへま
さるまで。かべくもおぼしぶりしゝばこゝいまぞ
まうされど。今らひわかするは。みれれきしへこそ
あざさゝあしま侍ありされ。つれぐとまみせされば
さふ心あつまやと世の人もせしもうらんとずくきの
ひくるまておをしにこそとはあらむして
あびく。ゐとちりひのは人ハワうさきぞや。いうしう

ちひのぼれど心うしともうちまず。恨おつ地りしゝすゝき
ずさしき心つくるか。(注ノ)いちけちくしより家のうち
よりおひ出て。身と心にまかせず事多くばこそ人
ものおやよりもあしくば。ろくちゝきそまりせや
ともんとつましげる。ちゝをすてゝ女ゝさとうが経
おひてよるもしらぬめしれとらしねあくく修と
おさゝ身の稍うちとけ心のまゝうちまひ(おや)地
たしるおか心とのびしとそりめれど。ちひまうけ世(一人ニオモヒヨセルカアルヲ云)
べきくさりひおさゝきさ。女のことまそあんうしこさ
人。昔もちぶうくあしるんまけるか。何のあしきことも
うみとつけて。人のみともそ。まづしも恨とおも

ちんはねの俤しくありけるをりおや(おやり)つ
さん人のゆかうろうるかれはず。あれおくふやくるさ
女しありとも。それをひん人さん心をあしらひて。ましは
おやの心にゆづり。(女ノ親ヲクダリタル心ハ離別ナリトソ)ましはおやあくて世中のさは
ありとも。人がしころぐっしくちゞをおもん人をば
それそるうざくはあきてもこゝろまへ親ゝあん人の
さあつねにあるべきこゝろぞかりあるべきなすぐ。
(比)のどやかにつれぐちゞおりはうしろつくろひを
のとさへのふ。ゆやう(タん)ちゝれいちあふりいゝそ
うしされてもはかざ後の心をちひつくろはゞ義に
へやりおそらず地はしのふ。(まぬん)女もつねにあるまじき。

おほくのちひ歌きのかへりは気色にかくしこうかた
すゑ見しものげめぐりへいつれなくおほとつゆそ
なりゆくすがし絵れ文はちひあまり絵かりく衣に
心かうさき海にさうし絵。女がまくことをつよちひ
ちらしよはなれさう今そあれじくちるに人のこゝろ
ともうるさぶふかれ衣よくは絵かしかは中務と
女なるん。大夜よもれなしさ絵りりてさしやと
めぼしくりしるろう人の宮しされば。かくぐへのさ
人しれもしかさらへし。思ひてさうくすそ
さうしが情あるさ人の心よもありけつされ。おとぐの
くちつれなひしよまうねりさそてひさ うぐへ

あふなるべし。心よくくなびきてもひとけくへなり
ましくるど。間をうけてのの人は。姫君いとまづ
しるまそこくとなく間の御かれば。さしくく
なくてそむさ給へるうろげさうぶりなし。べるま
きゆらしおもやすこいぞしがしきをうらしもなど
おぼしこぶれて。立給ぬるなおも。やぞてもしちらう
なぐめ給おやちく心をくれてもすこし出ける間なが。
へうまおぼしつくんなど。よろげる。ちひねさまへる
ほどるれ。かくあり。さかすゞるぞこゝふ。こ海やくりそて
つれなき文う世のかきまるりめとされ忠
人やひちまことなるど。あり。気色なりもかすめね

つれなきよとおもひつけのまいらすれど
かぎりこそ侍れどもとゞまりしもやまず
うびく心なきんとあるぞおやしとうちと
ねすうなつりぬなべるなぞ